

令和 4 年 5 月 24 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K03129

研究課題名(和文) 児童期・思春期の双極性障害傾向とADHDの併存の問題に関する発達心理学的研究

研究課題名(英文) Problem of coexisting bipolarity and ADHD in childhood and adolescence

研究代表者

田中 麻未 (TANAKA, Mami)

千葉大学・社会精神保健教育研究センター・特任講師

研究者番号：90600198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、児童期・思春期の双極性障害傾向に関連する心理学的な要因を明らかにするために、注意欠如・多動症(ADHD)との併存の問題を含めて検討することを目的とした。本研究の結果は、子どもがADHD傾向の評価基準を満たすかどうかによって、双極性障害傾向と自己制御の下位次元との関連性が異なることを示し、また、母親の精神的健康と子どもの双極性障害傾向との関連に異なる影響を及ぼすことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

双極性障害は、単極性のうつ病・躁病と比べると自殺企図率が高く、予後も悪い傾向にあることから、子どもの双極性障害傾向に関連する心理学的な要因を検討することは一次予防の観点からも重要である。本研究の結果から、ADHD傾向の特徴である不注意や多動行動の徴候の多少によって、双極性障害傾向と自己制御の下位次元との関連の仕方が異なることが示され、子どもの双極性障害傾向やそれに関わる問題行動の低減のためには、とくに興味・関心の一貫性を促すような働きかけが部分的に有効かもしれない可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to elucidate the psychological factors associated with bipolarity in childhood and adolescence, including the issue of comorbidity with attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD). The results found that there were differences in the association between bipolarity and the subdimension of self-regulation depending on whether the child met the assessment criteria for ADHD and various effects on the relation between maternal mental health and the child's bipolarity.

研究分野：発達心理学

キーワード：双極性障害傾向 ADHD 児童期 思春期

1. 研究開始当初の背景

成人期の双極性障害患者の初発年齢が10代の時期である症例も多くみられ、とくに米国を中心に子どもの双極性障害の症例や論文が急速に増加してきている。たとえば、双極性障害の成人を対象とした研究では、初発年齢が18歳以前の患者が50-60%、13歳以前の患者は15-28%であったことが報告されており(Perlis et al., 2004)、少なくとも患者の半数が10代の時期に双極性障害の徴候がみられていたことが分かる。これらの研究から、子どもの双極性障害に関連する症状を見逃さないことは、成人期以降での発症の予防にもつながることが期待される。しかしながら、その診断や評価の難しさから子ども期の双極性障害は見逃されているケースも少なくない(Scott-Gurnell et al., 2014)。子どもの双極性障害の評価の難しさの理由の一つとして、注意欠如・多動症(ADHD)との鑑別の困難さや併存頻度の高さが挙げられる(Singh et al., 2006)。これらの問題から、急速に増加してきた欧米における子どもの双極性障害は、実際以上に多く診断されているのではないということも懸念されている。したがって、子ども期の双極性障害に関連する要因を明らかにするためには、ADHDの併存の可能性を含めた検討が必要である。双極性障害は、単極性のうつ病・躁病と比べると自殺企図率が高く、予後も悪い傾向にあることから(Schaffer et al., 2015)、子ども期における双極性障害傾向に関連する心理学的な要因を検討することは一次予防の観点からも重要である。

2. 研究の目的

本研究では、児童期・思春期の双極性障害傾向に関連する心理学的な要因を明らかにするために、双極性障害の脆弱性に関わる要因の一つとして自己制御に着目し、子どもがADHD傾向の評価基準を満たすかどうかによって、双極性障害傾向と自己制御との関連の仕方が異なるのかどうかを明らかにすることを主な目的とした。また、子どもの環境要因の一つとなる養育者の精神的不健康が子どもの精神的不健康に与える影響に着目した研究も多数蓄積されてきていることから、母親の抑うつが子どもの双極性障害傾向に及ぼす影響についても検討を行った。

3. 研究の方法

本研究では、児童期・思春期の子ども(9-18歳)と母親を対象にして質問紙調査を実施した。調査方法は、本研究の協力依頼に同意の得られた小学校・中学校・高等学校、病院や各家庭における対面式または郵送で調査を実施した。質問紙調査票は子ども用と母親用をそれぞれ作成した。主要評価項目の構成は、精神的健康に関する精神医学的尺度(双極性障害傾向・抑うつ症状・ADHD)、個人内要因に関する内容(自己制御や社会性)などであった。その他に、基本属性として年齢・性別・家庭の社会経済的背景に関する内容・生活習慣などをたずねた。

4. 研究成果

(1) 児童期・思春期(9-18歳; 917名)を対象とした質問紙調査のデータを用いて、ADHD傾向の評価基準を満たしているかどうかによって、自己制御の下位次元(努力と忍耐、興味・関心の一貫性)と双極性障害傾向および双極性障害傾向に関連する諸症状との関連が異なるのかどうかについて、小学生(4-6年生)と中高生の発達段階ごとに検討した。その結果、まずADHD傾向の評価基準を超えていない群では、小学生と中高生ともに、自己制御の下位次元である興味・関心の一貫性が双極性障害傾向および自傷/他害行為傾向との間にそれぞれ負の相関を持つことが確認された。一方、ADHD傾向の評価基準を超えている群では、小学生と中高生で異なる結果が得られた。小学生では、努力と忍耐が双極性障害傾向および自傷/他害行為傾向との間にそれぞれ負の相関を持つことが示された。これに対して、中高生では興味・関心の一貫性と睡眠問題との間のみ負の相関が認められた。これらの結果から、とくに児童期の子どもの双極性障害傾向の低減

のためには、不注意や多動行動の徴候の多少に応じて、忍耐力あるいは興味・関心の一貫性のどちらの側面に比重を置くかを判断する必要があることが示唆された。

(2) 児童期・思春期の子ども(平均年齢 = 13.14, $SD = 1.94$)をもつ母親 696 名(平均年齢 = 43.73, $SD = 4.73$)を対象に、子どもが ADHD 傾向の評価基準を満たしているかどうかによって、母親の抑うつが子どもの自己制御を媒介して子どもの双極性障害傾向に及ぼす影響が異なるのかどうかを検討した。これらの調査研究の主な結果として、自己制御の下位次元である「努力と忍耐」においては、両群ともに、母親の抑うつの高さが子どもの双極性障害傾向の高さと関連する直接効果は認められたものの、母親の抑うつから努力と忍耐を媒介して子どもの双極性障害傾向への間接的な影響は示されなかった(Figure 1A)。

「興味・関心の一貫性」においては、子どもの ADHD 傾向の有無によって異なる結果が得られた。ADHD 傾向の評価基準を超えている群では、興味・関心の一貫性を通じた媒介効果は認められず、母親の抑うつの高さが子どもの双極性障害傾向の高さと関連する直接効果のみが示された。一方、ADHD 傾向の評価基準を超えていない群においては、上記のような直接効果に加えて、子どもの興味・関心の一貫性が、母親の抑うつと子どもの双極性障害傾向との関連を部分的に媒介することが明らかとなった(Figure 1B)。

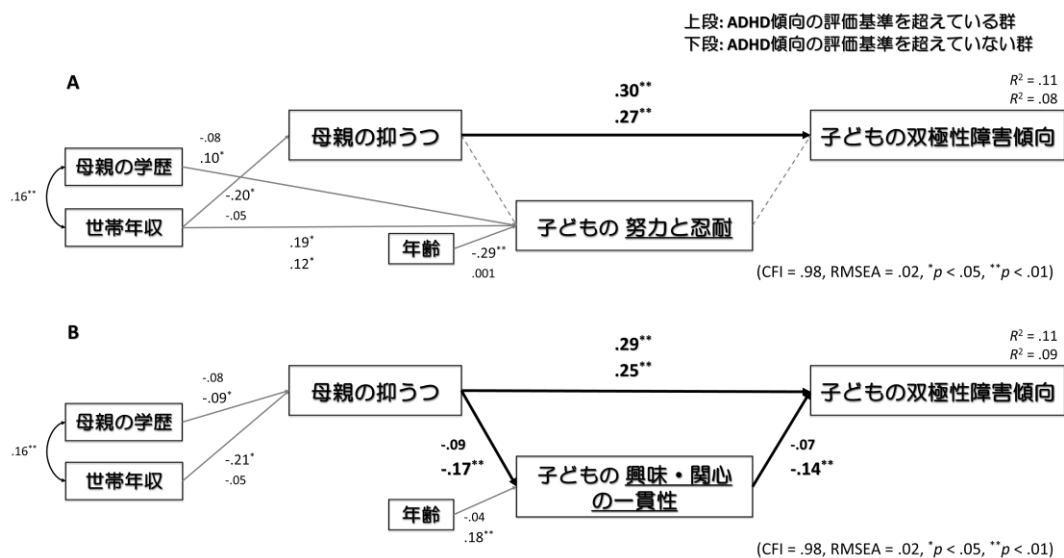


Figure 1. 多母集団同時分析の結果

また、ADHD 傾向の評価基準を超えていない子どもでは、興味・関心の一貫性の高さは、双極性障害傾向と関連の深い問題行動の一つである自傷行為傾向を低下させる可能性が示された。これらの結果は、子どもの双極性障害傾向やそれに関わる問題行動の低減のためには、子どもの不注意や多動行動の徴候の多少を考慮したうえで、母親の抑うつへの対応と同時に、子どもの興味・関心の一貫性を促すような働きかけが部分的に有効かもしれない可能性を示唆するものである。本研究課題を踏まえて、今後も縦断研究を継続し、子どもの双極性障害と自己制御の関連性のより詳細な検討や、その他の心理学的な要因の影響についても検討していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Seki, R., Hashimoto, T., Tanaka, M., Sato, A., Kimura, H., Kimura, A., Handa, S., Kanahara, N., Okayama, J., Omoto, A., Endo, M., Osone, Y., Watanabe, H., Tanaka, H., Nakazato, M., Shozu, M., & Iyo, M.	4. 巻 11
2. 論文標題 Relapse of psychiatric symptoms after discontinuation of antipsychotics in pregnant women with schizophrenia: a retrospective study.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Clinical Neuropsychopharmacology and Therapeutics	6. 最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5234/cnpt.11.61	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Okato, A., Hashimoto, T., Tanaka, M., Saito, N., Endo, M., Okayama, J., Ichihara, A., Eshima, S., Handa, S., Senda, M., Sato, Y., Watanabe, H., Nakazato, M., & Iyo, M.	4. 巻 13
2. 論文標題 Inter-agency collaboration factors affecting multidisciplinary workers' ability to identify child maltreatment.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 BMC research notes	6. 最初と最後の頁 323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13104-020-05162-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Jelenkovic, A., Sund, R., Yokoyama, Y., Latvala, A., Sugawara, M., Tanaka, M., et al.	4. 巻 10
2. 論文標題 Genetic and environmental influences on human height from infancy through adulthood at different levels of parental education.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Scientific reports	6. 最初と最後の頁 7949
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-020-64883-8.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tachibana, M., Hshimoto, T., Tanaka, M., Watanabe, H., Sato, Y., Takeuchi, T., Terao, T., Kimura, S., Koyama, A., Ebisawa, S., Shimizu, Y., Nagase, T., Hirakawa, J., Hatta, K., Nakazato, M., & Iyo, M.	4. 巻 11
2. 論文標題 Patterns in psychiatrists' prescription of valproate for female patients of childbearing age with bipolar disorder in Japan: A questionnaire survey.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychiatry	6. 最初と最後の頁 250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsy.2020.00250	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Silventoinen, K., Jelenkovic, A., Yokoyama, Y., Sund, R., Sugawara, M., Tanaka, M., et al.	4. 巻 22(6)
2. 論文標題 The CODATwins project: The current status and recent findings of COllaborative project of development of anthropometrical measures in twins.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Twin Research and Human Genetics	6. 最初と最後の頁 800-808
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Ogawa, M., Hashimoto, T., Tanaka, M., Tachibana, M., Seki, R., Sato, A., Okayama, J., Endo, M., Saito, N., Sato, Y., Watanabe, H., Nakazato, M., Mori, E., Shozu, M., & Iyo, M.	4. 巻 12
2. 論文標題 The effect of grandmothers' presence on the provision of multidisciplinary perinatal support for pregnant and postpartum women with psychosocial problems.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Multidisciplinary Healthcare	6. 最初と最後の頁 1033-1041
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2147/JMDH.S228320	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Silventoinen, K., Jelenkovic, A., Latvala, A., Yokoyama, Y., Sund, R., Sugawara, M., Tanaka, M., et al.	4. 巻 27(5)
2. 論文標題 Parental education and genetics of BMI from infancy to old age: A pooled analysis of 29 twin cohorts.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Obesity	6. 最初と最後の頁 855-865
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/oby.22451	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tanaka, M., & Hashimoto, K.	4. 巻 14(2)
2. 論文標題 Impact of consuming green and yellow vegetables on the depressive symptoms of junior and senior high school students in Japan.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0211323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0211323	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Okato, A., Hashimoto, T., Tanaka, M., Tachibana, M., Machizawa, Akira., Okayama, J., Endo, Mamiko., Senda, M., Saito, N., & Iyo, M.	4. 巻 11
2. 論文標題 Hospital-based child protection teams that care for parents who abuse or neglect their children recognize the need for multidisciplinary collaborative practice involving perinatal care and mental health professionals: a questionnaire survey conducted in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Multidisciplinary Healthcare	6. 最初と最後の頁 121-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2147/JMDH.S155352	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中麻未	4. 巻 55(3)
2. 論文標題 双生児法を用いた人間行動遺伝学 パーソナリティ特性と問題行動に関する心理学的知見	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 罪と罰	6. 最初と最後の頁 44-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 田中麻未・高橋雄介
2. 発表標題 母親の抑うつが子どもの自己制御と双極性障害傾向に及ぼす影響：子どものADHD傾向の有無による違い
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tanaka, M., Takahashi, Y., & Sugawara, M.
2. 発表標題 Differences in pubertal status in genetic and environmental influences on social support and depression among Japanese adolescents.
3. 学会等名 49th Annual Meeting of the Behavior Genetics Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中麻未・高橋雄介
2. 発表標題 親のソーシャル・サポートと子どもの抑うつにおける遺伝と環境
3. 学会等名 日本双生児研究学会第33回学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中麻未・高橋雄介
2. 発表標題 子ども期の双極性障害傾向の変化と自己制御の変化の関連性
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第27回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	橋本 謙二 (HASHIMOTO Kenji) (10189483)	千葉大学・社会精神保健教育研究センター・教授 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------